

## 平成 29 年度 第 1 回 学校協議会

### 1 開会（事務局より）

### 2 校長挨拶

### 3 学校協議会委員ならびに事務局・教職員の紹介

### 4 学校の様子について

各部の 1 年間の予定を報告

<委員からの意見>

- ・ 活動内容を聞いて、思いやりなど日本の学校のいいところ。教育の根本として、協調性、自主性を小さい時から身につけていくことが大切。説明を聞いて、きちんと実践されていると感じた。

### 5 議事

#### ・平成 29 年度学校経営計画について

学校長より説明

（中期的目標）

- 1 安全で安心して学べる学校づくり
- 2 子どもが社会参加及び貢献できるよう、教職員必要な知識と技能の習熟を図り個のニーズに応じた指導
- 3 聴覚障がい教育のセンター的機能の充実

<委員からの意見・質問>

#### ・避難訓練は、校内だけの実施か？

→（学校長より）9/16（土）に地域と防災訓練を行う。校外に出ているケース、管理職がいないケースなど、いつ起こるか分からない。

・大教大池田小の不審者対応の訓練は、実習生が泣くほどリアリティがある。追い込むことへの配慮は必要だが、現実どれだけできるリアリティを高める必要がある。情報伝達のしかた、聴こえない子どもへの配慮等、日ごろから訓練が必要。私自身も「トイレに入っていた子どもを避難させられなかった」など以前に経験がある。SPS をめざし、聴覚支援校としての取り組みを先進校として発信していくことをめざしてほしい。

・合理的配慮に関して PTA でアンケートをとった。府への要望として、「先生方の手話を向上させてほしい」が 95%。手話はもちろん大事。しかし、子どもの成長から見ると、先生方の手話向上を待ってられない。手話だけに頼らない情報保障を考えてほしい。今まで聴覚障がいの生徒を受け持ったことのない学校でどんな工夫をしたかというモデルを、聾学校だけに限らず（聾学校の質の高い授業も大切にしたいが）、いろいろな進路選

択ができるように。高校への進学実績のデータがほしい。いろいろな選択肢を増やしてほしい。高等部自身の魅力は高まってきている。高等部にも行きたいし、他の学校にも行ってみたい。「他は難しいから高等部でいいや」ではなくて、前向きな選択ができるようにしてほしい。

- ・高等部の進路と、企業としてもいろいろやり取りをしている。手話研修を月に2回昼に行っているが覚えた人は10人に1人ぐらい。卒業後、手話だけではやっていけない部分もある。社会に出た後をにらんで手話を使わない授業もいるのでは。そうなると思うことが大事になってくる。

- ・研究授業30回、レッスンスタディということで、ぜひすすめてほしい。イギリスは学校主導で研修体制がある。自分たちで授業の振り返りをする。授業を見て、自分の授業を振り返る。それがうまくいっていることがポイント。一人ひとり学びを深めていってほしい。教育力の向上とともにフォローアップも密にし、外部へ進学した生徒との関係も保っていただけたら。合理的配慮に関して、個別の支援のあり方、授業が変わってきた。通常の学校の授業に近づいている。一人ひとりに適切な配慮から、みんながわかりやすい授業に広がっていく。一人ひとりの視点におおしながら全体の視点でも考えていく。一人ひとりどういう配慮をしながらみんなで学びあえる授業をするか、という意味で「準ずる教育」に近づいてきている。本校なりの研究の進め方をぜひ発信してほしい。では、次に3番目について説明を。

- ・最終評価で100%としてしまうと、◎の評価ができなくなる。記述で付加価値として付け加え、クオリティの部分に記述しながら広げていくとよい。校長のリーダーシップが発揮され、校長自身が夢を語り取り組んでいると思う。

- ・幼稚部より人間性豊かな取り組みを聞いている。出発点の早期教育相談についてのイメージについて、調整区域の子どものケースもあり、病院の立場として保護者に伝えられることがあれば教えてほしい。

- （学校長より）いろいろな思いの中で育ててこられている。一つの希望を見出すために病院へ、あるいは早期教育相談へこられている。子どもの言語力を引き出すかかわり方を親に教育すること。家庭でもできる会話なりかかわり方を親に教える。言語力を高めるかかわりを肌で感じてもらいながら一步一步歩いてもらう。堺、生野とは形態が違うが選ぶのは保護者。まず相談できる場所があること。かかわりの中で気に入ってもらえたら来てもらう。

- （委員より）いろいろ相談に行ったが、あるところでは日記でのやり取りをして、いろいろ赤で母親にダメ出し。それが親としてはつらい部分も。本校はかかわりがやさしかった。幼稚部から高等部まであり聴覚障がいの方が見えやすい所。センター的機能のことで、だいせんを見学して「先輩の話を聞く会」があり、高等部から聾学校へきた生徒の話があった。インテグレーションから始まったが、自分の希望として聾学校で学びたいというケースがある。

- ・大学には特別専攻科があり、聴覚障がいの方が聴覚の免許をとりたいというケースもある。専攻科から大学院へという道もできてきている。

- （学校長より）健聴の世界を知ってから聾学校の教員をめざすケースもある。コミュニケーションなどで苦しかったこと、それを子どもたちに教えてほしい。頑張れる子を育ててほしい。

- ・学びの場である古巣に戻っていく学生たちもいる。

- （委員より）若い子たちは、会社で言いにくい部分など先生に相談する。聞いてもらえるつながりがあるので、今は落ち着いてきている。連携するということ。

→（学校長より）教員は卒業後もよくかかわってくれている。

## **6 事務局より連絡**

教頭より、今後の協議会の予定と学校行事について連絡

## **7 閉会**